

## 私たちのバラは名もなきバラ

校長 小川幸司

### 1 私たちのバラは名もなきバラ

ヨーロッパでは、ローマ帝国が滅亡してからルネサンス・大航海時代・宗教改革の三大改革が始まるまでの約 1000 年間、ローマ教皇を頂点とするキリスト教(カトリック)が大きな権力をもつ「中世」という時代でした。

この時代の文化は、教会の建築であったり、スコラ哲学と呼ばれる神学であったり、すべてはキリスト教に彩られていました。ちなみにキリスト教のカトリックとは、紀元前 4 年頃に生まれてユダヤ教の改革をはかり、最後はローマ総督によって死刑(十字架刑)に処せられたイエス・キリストが、神であり聖霊であったと考える宗教です。

今日は、ひとつの映画の紹介から始めます。現代イタリアの哲学者ウンベルト・エーコが書いてベストセラーになった推理小説をジャン・ジャック・アノーという有名なフランスの監督が映画化した『薔薇の名前』(1986 年、フランス・イタリア・西ドイツ合作)というサスペンス映画があります。

舞台は、1327 年 11 月末のある美しい朝、北イタリアの山の上の修道院です。「キリスト教徒は貧しくあるべきか」というテーマで対立が起こっていて、この議論に参加するためにウィリアム修道士が、弟子のアドソを連れてやって来ます。まるで彼の到着を待っていたかのように、修道院の建物内で次々に陰惨な連続殺人事件が起こります。ウィリアムは卓抜な推理力を“実証的に”積み上げながら犯人を捜しますが、後からやってきた悪名高き異端審問官ギーが、無関係の修道士と農民の娘を捕らえ、拷問の末に自白を無理やり引き出して、火あぶりの刑を宣告してしまいます。でもウィリアムは、殺人事件の核心には、修道院の片隅にある図書館の奥の“禁書室”(読むはいけない本の部屋)が関係していると推理し、図書館の高い塔の上にいる“真犯人”と対決するというあらすじです。怖い場面もたくさんある映画ですが、ヨーロッパの中世の雰囲気を見事に再現している映画なので、是非、観てみてください。

この映画は、話の伏線として、弟子のアドソが農民の娘の美しさに“恋”してしまい、火刑に処せられようとする女を救出しようとする筋立てが加わっています。映画の最後でアドソは娘と別れるのですが、愛した女性の「名前」を知らなかったことに気づきます。そしてラストシーンには、次のような字幕が映し出されて映画の幕がおろされるのです。

——バラとは神の名付けたる名前。

私たちのバラは名もなきバラ。

### 2 スコラ哲学の普遍論争を考える

スコラ哲学は、ヨーロッパの教会や修道院の教室においてディスカッション形式で探究された哲学です。教会の教室のことを「スコラ」と言いました。“school”の語源

です。このスコラ哲学でうみだされた著作は、日本語に翻訳されているのですが、とにかく難解です。でも私はこのスコラ哲学の「普遍論争」というディスカッションで探究されている内容にとっても関心がありました。「普遍論争」というのは、実在論と唯名論のあいだの論争なのですが、その唯名論のリーダーであるウィリアム・オッカム（『薔薇の名前』のウィリアム修道士のモデル）の『大論理学』という大著の中に、次のような一節があります。

——単純代示とは、語が心の観念を代示する場合であり、こうした観念が述語づけによって、外界の複数の事物に共通な普遍なのである。（…）外界の事物の側には、端的に個である物以外には、何も存在しないのだからである。

かくして、「外界の事物のうちに、個物以外に何か或るものが存在する。例えば、個々の人から区別された人間の本性が、諸々の個物のうちに、それらの本質に属するものとして存在する」と考えた全ての誤謬が、彼等をこれらやその他の多くの論理学上の誤りへと陥らせたのである。（Ⅱ巻、p.150）

最初、皆さんは「これが日本語か？」と思ったことでしょう。でも読書のトレーニングを積み重ねていくと、こうした哲学の文章の意味が理解できるようになってくるのです。オッカムの哲学をかみくだいて説明してみましょう。

たとえば、「バラ」という名前があります。これについて、スコラ哲学の実在論の立場に立つ人々（アンセルムスなど）は、神が世の中のすべてのバラに共通する本質を定めたから、私たちは様々なバラをみて、「これがバラだ」と認識できると考えました。それぞれの個物より前に、神が定めた“共通する本質”（普遍）が実在すると考えたのです。

これに対してウィリアム・オッカムはこう考えました。神が定めたのは、バラという名前だけであり、その名前を使って個物を認識していくのは人間の行為である、と。神が定めたのは、ただ（唯）、名前だけだというので、この立場を唯名論と言います。

思い切りこのことを身近な例のなかで考えてみましょう。一組の高校生のカップルがこういう会話をしたとします。

——男子生徒「ボクはバラが好きだ。」

女子生徒「私もバラが好き。」

二人で見つめ合いながら「同じだね。」（ほほえみあう。）

今、二人は同じ花の種類が好きなのだ、似た者同士だと、ほほえみあいました。「バラ」という名前を使ったときに、神が定めた「共通する本質」（＝同じもの）を心に思い浮かべていると思い込んでいるのです。スコラ哲学の実在論の状態です。

ところがよく考えてみてください。私たちが「バラ」という「ことば（名前）」を使って頭の中に思い浮かべているのは、植物図鑑の分類図版ではなく、何か今までの経験で出会った「個物」のバラなのです。男子生徒のバラは、小学校の花壇に咲いていた大きな華やかなバラであり、女子生徒のバラは、遠くの祖母の家の庭で咲いていた可憐なバラなのかもしれません。お互いに「バラが好き」と言っているけれども、具体的なそれぞれの花を見たら、「それ私の好きなバラとは違う」と思うかもしれないのです。同じなのは「バラ」という「ことば（名前）」だけであって、お互いの心の中にある花は実はまったく違うものなのです。これがオッカムの唯名論です。

### 3 人と人はわかりあえるのだろうか

オッカムの哲学は、とても鋭いところをついていると思いませんか。

「ことば」でわかりあうということがいかに難しいことか。私たちは「ことば」を使って一生懸命コミュニケーションをするけれども、その「ことば」の奥にあるものが、実はひとりひとり違うのです。

だから、とてもわかりあえているように思えたカップルが、次第に相手の言うことすべてに共感できなくなっていて、どうして自分たちはこんなにわかりあえないのだろうか絶望して別れていく。人間がわかりあえるということは、そんなに簡単ではないということがわかってくるのです。いくら身体で愛を確かめたとしても、人間は必ず「ことば」で理解し合えなければ、淋しさを覚えます。

オッカムの哲学に立てば、人間は究極的には人とわかりあえない。孤独です。

しかし、そのことを踏まえて、それでもなお「ことば」を通じてわかりあおうと努力を続ける。対話を続けていく。それが人間なのだろうと私は思うのです。なぜかというと、私が孤独であるのと同じように、あなたも孤独であるからです。そして互いに孤独であるということは、たったひとりの、他のものと交代できない、かけがえのない「いのち」 どうしであるということです。

映画『薔薇の名前』のラストの字幕に戻ります。

——バラとは神の名付けたる名前。

私たちのバラは名もなきバラ。

私たちの心の中のバラは、バラという「ことば」で簡単には表現できないようなバラなのです。ならば、心の中のバラがどのような花なのか、相手に丁寧に語りかけていくしかない。そうして私たちは、この世界で最も心惹かれる人との愛を育てていくのです。

簡単に私たちはわかりあうことなどできない。そして、だからこそ、私たちはあきらめずに「ことば」で対話をしていこう。そのなかで最も大切な人との愛は少しずつ育まれていこう。——というのが、今日の結論です。

今、カップルの日々を楽しんでいる皆さん。あなたたちは遠からず別れる可能性があります。だから相手を信じ切ってはいけないし、自分を縛るような約束をしない方がいい。(自分の進路を左右させるなど論外。)ほかの皆さんは、早くにカップルになろうと焦ってははいけません。「ことば」による対話ができるような人間に、自分を成長させていくことが、一番大切なことなのだと思います。土台のない恋は、簡単に崩れるでしょう。

たくさんの試行錯誤を重ねながら、「ことば」を丁寧に伝え合うことができるようになっていけば、本当のパートナーどうしになれるのだと思います。

まさかサスペンス映画やスコラ哲学から、愛の可能性という話題になるとは思わなかったでしょう。だから考えるということは、楽しいし、役に立つのじゃないかな。

(おしまい)

**【参考文献】**

ウィリアム・オッカム、渋谷克美訳注『オッカム「大論理学」註解』全5巻（創文社、2005年）

渋谷克美『オッカム「大論理学」の研究』（創文社、1997年）

山内史朗『普遍論争』（平凡社ライブラリー、2008年）

ウンベルト・エーコ、河島英昭訳『薔薇の名前』全2巻（東京創元社、1990年）